



Title	価値の問題一中・後期ニーチェ哲学における道德批判と歴史的哲学一
Author(s)	谷山, 弘太
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77582
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (谷 山 弘 太)

論文題名

価値の問題
—中・後期ニーチェ哲学における道德批判と歴史的哲学—

本稿は、F. ニーチェによる道德批判の内実を明らかにすることを旨とする。ニーチェは自らの批判を道德的価値判断の価値を批判する試みとして規定している。だが、ここで言う「価値」が何を意味するのかは必ずしも明確ではない。そこで本稿は、この〈価値の問題〉をニーチェ独自の「歴史的哲学」との関連から解き明かすことを目指す。〈価値の問題〉はさらに①〈価値の否定〉と②〈価値の再評価〉という二つの問題へと分割される。①：一般にニーチェは、キリスト教道德の「恥ずべき起源」（例えば「ルサンチマン」）を暴露することで、その価値を否定しているのだと理解されている。だが、この場合ニーチェによる批判はその対象たるキリスト教道德と共通の価値判断に基づき、それ故にこの道德的価値判断それ自体を批判するものではないということになる。従って、道德の価値は既存の価値判断を前提にすることなく否定されるのでなければならない。②：しかし、ニーチェの道德批判は、単に道德の価値を否定するだけに留まるものではない。そのことは、「道德の自己超克」という名高い議論の内ですべて示唆されている。道德の自己超克とは、キリスト教が培った「知的良心」がキリスト教道德自体を超克するという歴史のプロセスであるが、ここでニーチェは道德に自己自身を超克する可能性を見定め、その価値を再評価しているように思われるのである。問題なのは、ニーチェのテキストにはそれぞれ〈価値の否定〉と〈価値の再評価〉とに関わる言明が混在しており、それらの関係性が明らかではないということである。そこで本稿では、中期から後期にかけてのニーチェによる議論を詳細に検討することで、道德に対するニーチェの微妙な態度を解きほぐしていく。

まず第一部では、中期の開始を告げる著作『人間的、あまりに人間的』を取り上げ、総じて〈価値の問題〉について考察するための足場を固める。

第一章では、〈価値の否定〉の問題に関して、同書の形而上学批判を検討する。一般に当時のニーチェによる批判は、科学的な認識を用いて、形而上学的な理想をその背後に潜む些末で卑しい「人間的、あまりに人間的」な心性に還元するものであると理解されている。だが、ニーチェの真の関心はこの〈還元主義的批判〉が生じる価値を否定してしまうということに存している。この種の批判は形而上学と共通の価値判断に基づいており、それ故にニーチェはまさに形而上学に由来するそうした価値判断をこそ解消しようとしていると考えられるのである。

続く第二章では、〈価値の再評価〉の問題に関して、同書の理想的類型である「自由精神」について検討する。この類型は自由意志という形而上学的仮説を否定し、「過去への責任」＝道德的責任を解消する。だが、だからといってニーチェは形而上学ないし道德をいわば歴史の汚点として全面的に否定しているわけではない。ニーチェによれば、人類を単なる動物＝「ヒト」から社会的動物＝「人間」へと訓育してきたのは道德に他ならない。このように、ニーチェは道德の歴史的意義を再評価し、人類の自己教育というその事業を批判的に継承する「未来への責任」を担う歴史的存在として、自由精神に形而上学に代わる新たな理想を託していると考えられるのである。

次に第二部では、『人間的』に続く中期の著作『曙光』を取り上げ、第一部第一章で論じた〈価値の否定〉の問題についてさらに集中的に考察する。

第三章では、道德の起源についてのニーチェ独自の着想である「習俗の倫理」について検討する。ニーチェは「倫理」の起源を太古の人類を支配した「習俗」に求める。先行研究においては、この着想は習俗への服従を命じる超常的存在（＝神）に対する空想的・迷信的な恐怖が「道德的感情」の基礎に存することを暴露するものであると理解されてきた。翻って、ニーチェはそうした誤謬を排除し、より合理的な生き方を追究しているのだ、と。だが、ニーチェによれば習俗の倫理は現代の合理的精神にとっても決して無縁ではない。むしろこの着想は合理的精神を含むあらゆる道德的感情が〈刷り込み〉として無批判に受容される過程を記述するものであり、かくてニーチェは道德的感情の無根拠さを暴露することで道德の価値を改めて問い直そうとしていると考えられるのである。

続く第四章では、ニーチェによる道德批判の内実さらに踏み込んでいく。ニーチェは『曙光』アフォリズム103番で道德批判を〈欺瞞の批判〉と〈誤謬の批判〉の二つに区別する。一般に、これによって初めてニーチェは

既存の道徳的価値判断を前提する〈欺瞞の批判〉（＝〈還元主義的批判〉）から決別し、道徳的価値判断それ自体の批判に着手したと理解されている。だが、ニーチェは道徳的価値判断ないし道徳的感情が空想的・迷信的な恐怖に基づくことを根拠にこれを否定しているわけではない。むしろ問題なのは、既存の道徳的規範が行為のメカニズムに関する誤謬に基づいて本来実行不可能な行為を人間に要求することである。ニーチェによれば、そうした規範に対する道徳的感情を〈刷り込み〉として受容することによって（習俗の倫理）、人間は「苦しむ高邁な者」となった。すなわち、不可能な行為を要求する道徳的規範にとことん「誠実」であろうとすることで、「疚しい良心」を伴う際限のない自己批判へと堕ち込んでいったのだ、と。このことから、ニーチェは、誤謬に基づく道徳に無批判に従う「結果」に関して、その価値を否定しているのだと考えられるのである。

最後に第三部では、後期の著作のうち特に『道徳の系譜学』を取り上げ、第一部第二章で論じた〈価値の再評価〉の問題についてより詳細に考察する。

第五章では、同書第二論文の冒頭で論じられる「主権的個人」について検討する。〈約束することが許される〉動物とも言い換えられるこの謎めいた類型によって、まずニーチェは人類が〈約束することのできない〉単なる動物から〈約束することのできる〉動物（社会的・道徳的動物）になった過程を記述していると思われる。次にニーチェは、この「人間の社会化」の先にさらに〈約束することが許される〉動物を置くことで、人類がその道徳的段階をも超克する可能性を示唆している。これによってニーチェは、人類の発展の歴史を人類がその都度自らの現段階を超克していく「人間の自己超克」という歴史のプロセスとして捉え直そうとしていると考えられるのである。

続く第六章では、第二論文本来の主題である「疚しい良心」と人間の自己超克との関連について考察する。ニーチェは疚しい良心を人間の社会化に伴う「重い病」とであると診断すると同時に、それを人間の自己超克の前提条件であるとも見なしている。疚しい良心に対するこうしたニーチェのアンビバレントな評価に関して、多くの先行研究はキリスト教以前の〈疚しい良心①〉とそれ以後の〈疚しい良心②〉とを区別し、キリスト教の介入によって疚しい良心が悪質化したことを問題視している。だが、事の核心はむしろ〈良心への応答〉というより本質的な契機に存している。ニーチェによれば、これまで人類は疚しい良心が突き付ける厳しい要求に繰り返し応え続けることでその都度自らの現段階を超克してきたのであり、同様にキリスト教の当為との闘いが遂には道徳の自己超克をも可能にするのである。一方、良心への応答を放棄するとき、疚しい良心は罪悪感に伴う自虐の快感にひたすら耽溺する〈良心の呵責〉へと悪質化する（＝「疚しい良心に憑りつかれた人間」）。このようにニーチェは人類の発展のプロセスを〈良心の系譜学〉として記述し、疚しい良心の要求に応えることから獲得される〈晴れやかな良心〉に人間の自己超克の前提を見定めていたと考えられるのである。

最後に第七章では、人間の自己超克との関連で、第一論文に登場する「高貴な者」と疚しい良心との関係性について検討する。一般にこの類型は人間の社会化以前に存在した疚しい良心を持たない「金髪の野獣」と同一視されているが、その本質はむしろ貴族社会の「距離のパトス」に基づいて自分よりも上位の者との対等性を獲得しようとするその精神的な強さにこそ存している。また、高貴な者のこの精神性は疚しい良心というその内面的な自己関係においても発揮され、かくてニーチェは疚しい良心の厳しい要求に応えることで人間の自己超克を遂行する存在としてこの類型を高く評価していると考えられる。一方、現代に優勢を占める「畜群」という類型はあらゆる位階を否定し、もはや疚しい良心の厳しい要求を引き受けようとはしない。それ故にニーチェは、現代においてもなお疚しい良心を保持する高貴な精神に人間の自己超克の歴史を継承する可能性を託していると考えられるのである。

さて、以上の本稿全体考察から、中・後期ニーチェ哲学に通底する特徴として次の二点を取り出すことができる。第一に、〈価値の否定〉の問題に関して言えば、ニーチェは自らが拠って立つ前提に常に批判の目を光らせて続けていたと言ってもよい。少なくとも中期以降、ニーチェが既存の価値判断を無批判に前提して何かを批判することなど一度もなかった。むしろニーチェは特定の価値観を自明視することから（他者のみならず、自己自身に対して）生じる暴力性をこそ問題視していた。ここには「道徳」に潜在する暴力性に対するニーチェの透徹した洞察が見られるのである。

第二に、〈価値の再評価〉の問題に関して言えば、ニーチェは道徳の歴史的意義を決して全面的に否定しているわけではないと言うことができる。確かに既存の道徳的価値判断は疚しい良心ないし良心の呵責という過度の苦悩を生み出した。だが、そうした苦しみがなければ人間は動物的段階に留まっていたであろうし、またこれを失えば再び動物的段階へと退行していくことになるであろう。従って、よく誤解されるように、ニーチェは道徳以前の野蛮な時代を単に礼賛しているのでも、道徳をもはや無用の長物と見なしているわけでもない。むしろ、道徳が果たしてきた歴史的意義をしかと見定め、これを批判的に継承することがニーチェの真の問題意識であったと言ってもよい。かくて本稿の考察は、ニーチェ哲学の破壊的側面のみならず、その建設的な側面にも光を当てることに寄与するものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (谷 山 弘 太)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	須藤訓任
	副 査	大阪大学	教授	望月太郎
	副 査	大阪大学	教授	舟場保之
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：価値の問題―中・後期ニーチェ哲学における道德批判と歴史的哲学―

学位申請者 谷山弘太

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	須藤訓任
副査	大阪大学教授	望月太郎
副査	大阪大学教授	舟場保之

【論文内容の要旨】

本論文の狙いは、ニーチェの道德批判の理論的含意を可能な限り掘り下げ、その思想的特色を浮き彫りにすることに存する。ニーチェの道德批判といえば多くの場合、1880年代後半の後期思想に焦点が当てられるが、筆者は70年代末から80年代初頭にかけての中期思想の重要性も強調する。そのことによって、顧みられることの比較的少ない中期の思想的豊饒性を抉り出すとともに、ニーチェ哲学の論理的一貫性を説得的に明確化しようとする。筆者によれば、ニーチェの道德批判の核心は「価値の問題」に集約され、その二本の柱となるのが「価値の否定」および「価値の再評価」である。この二本柱はたしかに後期になってはじめて最も完備した姿を呈するが、しかし中期においてもその基本路線はすでに確立されていたのであって、その確立と展開の仔細を明らかにすることによって、歴史的哲学と連動して繰り出される道德批判の内実が、先行研究を踏まえ又乗り越える形で、論究されるのであればならない。そのため、本論文は「序論」と「総括」に挟まれた三部構成をとり、第一部では中期の代表作『人間的、あまりに人間的』（以下『人間的』）上下が主たるターゲットとされ、第二部では中期の第二作『曙光』と周辺の遺稿が取り上げられ、第三部では後期の道德論の中枢をなす『道德の系譜学』（以下『系譜』）の理論的解釈の深化が試みられる。全体の分量は、A4判で総計138頁、400字詰め換算で500枚強である。

第一部「歴史」と「批判」――『人間的』における＜価値の問題＞」では一方で、『人間的』に示された道德論が単に、道德的行為の動機の非道德的不純さを暴露するにとどまるのではなく、道德的行為を道德的たらしめる価値観を根本的に問題に付していること、したがってすでにこの時点で「価値の否定」の基本論旨が明確に萌していることを、微に在るテキスト解釈を通して明らかにし（第一章）、他方で、従来の価値観および過去への責任から解放された「自由精神」がだからこそ未来への責任を担うようになる可能性が模索されていたその理論的経緯を解き明かそうとする。そこには、歴史的過去事象の自覚的継承の課題が漏らされており、したがって、「価値の再評価」の問題意識が垣間見られることも、察知される（第二章）。続く第二部「学び直す、感じ直すために――『曙光』における＜価値の否定＞」は、「道德的先入見に関する考察」という副題を持つ『曙光』を取り上げ、道德批判の理論的困難さが根差している先を「習俗の倫理」として特定し、同倫理が道德的感情の無根拠なく刷り込み>であるがゆえに、習俗を迷妄として否定する合理精神をも束縛する制約となっていることを、先行研究への批判を通して明らかにする（第三章）。この成果を踏まえ、第四章では同書で道德批判が「欺瞞の批判」と「誤

謬の批判」に区別され、後者に批判として軍配が挙げられる理由を、道徳が実行不可能な要請として掲げられ、その「結果」として人間が「苦しむ高邁な者」たらざるを得ない状況に追い込まれるところに突き止めようとする。この実行不可能な「結果」に対する拒否が、ニーチェにとって、「価値の否定」のより進化した形態をなすことになったというのが、本章の結論である。

最終第三部「＜良心の系譜学＞——後期ニーチェ哲学における＜価値の再評価＞」では晩年のニーチェの道徳批判が正面から論究される。中心をなす著作はむしろ『系譜』、なかでもその第二論文である。第五章は当の第二論文の冒頭数節に登場する「約束することが許される動物」という謎めいた文言をテーマとする。「許される」はたいてい「できる」の意で訳されているが、厳密にはそうではないことを筆者は重要視する。むしろ、約束という事象をめぐってニーチェは約束まで至らない段階、「約束できる段階」そして「約束が許される」段階と、道徳現象の歴史が三段階に区別されると考えていたのであり、第三の「約束が許される」段階とは従来の道徳を超克した段階を展望している、とする。それゆえ、第二の従来の道徳的段階から第三の超道徳的段階への進展がどう把握されるべきかが問題となるが、この問題に取り組むのが、「疚しい良心のアンビバレンツ」をテーマとする、本論文全体のクライマックスをなす、続く第六章である。疚しい良心がキリスト教以前の段階とそれ以後とに大別されることを先行研究の成果も取り入れながら、詳細に論じ、また前者の良心を回復しそれが突き付けてくる諸課題にいかに応えていくかというところに、従来の道徳の超克の本質が存していることを論証して、こうした課題への応答としての「高貴」さについて、その現代的対照存在としての「畜群」と対比しながら、その主たる特性を解明する最後の第七章へと議論を引き継ぎ、本論文は閉じられる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の最大の意図は、ニーチェの道徳批判の核心を「価値の問題」と見定め、それを「価値の否定」と「価値の再評価」という二側面から論じてゆくところにあるが、この意図は基本的に成功裡に実現されていると評価してよい。「価値の否定」とは言っても、それは個々の道徳的行為や価値判断ではなく、そうした個々の判断の大本をなす「価値」、すなわち、従来の価値観の総括的「価値」に対する根底的疑義の提起となりえていることを説得的に論証している。そういう根本的否定でありながら、いや、そうであるからこそ、その否定がしかるべく成立するためには、そのための背景や条件となる歴史的経緯が不可欠であったのであり、それゆえ、この否定のためにも、歴史上の道徳的「価値」が再評価され、取るべきものはしっかりと保持され継承されねばならない。そこに「価値の再評価」という問題意識がニーチェ自身にとっても必須となる。この必須の問題意識は、従来のニーチェ研究にあっては、道徳批判に目を奪われ、ともすれば等閑視されかねないものであった。ここに、即ち、「価値の否定」と「価値の再評価」を一組の問題事象として剔抉して見せたところに、本論文の最大の意義がある。

ただし、個別的には、いろいろ問題が残されている。中期哲学が後期の道徳論の先取りとなっていることの論証では、中期に後期が密輸入的に前提された議論の運びが窺われるし、また本論文の白眉、第六章における二種類の疚しい良心の区別と関係づけもより明快さを望みうる箇所も残されている。第七章におけるある種のポピュリズム批判も、逆にパターンリズムに反転しないか、懸念が残る。第五章の「許される」との訳語もドイツ語の理解としてどこまでの確か、したがって、そこからの帰結に関しても、まだまだ検討の余地があろう。「価値の否定」が道徳の総体的把握なのに対し、再評価は個別的な事柄であり、こうした次元のギャップをいかに統合するかも、課題となろう。このように問題とすべき点は多々あるが、しかし、これらの点は本論文の主要成果を帳消しにするようなものではないし、今後の研究の進展によって、発展的に解消されてゆくことも十分見込まれる。

よって本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。